

研究課題

「伝えて繋ぐ」ためのツール『情報バンク』システムの開発と有効活用

副題

～子どもの継続的なキャリアアップを目指して、子どもの「できる」を学校外の様々な場や将来に「伝えて繋ぐ」～

学校名

京都市立西総合支援学校

所在地

〒610-1101
京都府京都市西京区大枝北沓掛町1-21-21

ホームページ
アドレス

<http://cms.edu.city.kyoto.jp/weblog/index.php?id=400503>

1. 研究の背景

本校では、学校教育目標を『『できる』自分を知り、夢や希望を持って、自らひと・もの・ことに向かう子どもを育てる』と定め、教育実践を進めている。その中で、最も重きを置き取り組んでいることが「できる」からのスタートである。子どもを「できる存在」として捉え、子どもの生活年齢に考慮した援助つき手だてつきで、「できる姿」を実現する。そして、子ども一人一人の「できる」ことから取り組み、それぞれの学習場面・生活場面で主体的に自信を持って活動することを目指している。主体的に自信を持って物事に取り組んだ結果、本人を取り巻く多くの人々に認められたり、賞賛を得たりすることで達成感や自己肯定感が培われると考える。そのことで「もっとやりたい」「あんなこともしてみたい」という自ら“QOL(生活の質)”を高めようとする気持ちを育むことを目指している。

そこで、本校では近年の研究結果や課題から、“QOLは、子どもが継続的にキャリアアップしていく中で高められる”(『平成23年度研究紀要』)という考えのもと、個別の包括支援プラン(個別の教育支援計画と個別の指導計画の要素を併せ持った京都市独自のもの)を活発かつ確実に更新し、子ども一人一人のキャリアアップを目指した目標をたて、日々の授業実践の中で、その目標達成に向けて取り組んでいる。その場限りの「できた」「できる」の単発ではなく、「できる」からスタートし、「できる」を高めたり、次の場面や次のステージに上げたりすることが、確実な「できる」であると考え。そして、その「できる」を積み重ねていくことこそがキャリアアップだと考え、研究を進めている。その中で、学年・学部の移行期や高等部卒業後の生活へ、子ども一人一人の「できる」の情報をきちんと残し、できる限りたくさんの方の支援者が共有し、子ども一人一人に応じた情報を伝えられるかが鍵となる。

2. 研究の目的

小学部入学から高等部卒業までの12年間、個々の児童生徒の情報を個別の包括支援プランに記載し、その内容から、学習計画や目標を考察し、日々の実践として取り組んでいく。そこには、子どもの「できる」について多岐にわたる記載がされており、その内容の更新は時期に関係なく「できる」が確認できた時点ですみやかに行う。また、その更新をしたものから、新たな学習計画や目標が考察されるという「できる」を伝えて繋ぐツールである。しかしながら、個別の包括支援プランを「できる」を伝えて繋ぐツールとして活用しようという指導者の意識はあるものの、その活発な活用に結び付いておらず、年度内に2回程度(前期・後期終了時)しか更新されていないことが長年の課題であった。

そこで、24年度、なぜ個別の包括支援プランが伝えて繋ぐツールとして使いにくいのかを検討したところ、記載されている内容が、“指導後・学習後の結果”「～できた」という「現在の姿」が大半であるため、担当の指導者が大幅に変わることの多い、児童生徒の進級時・学部移行期そして高等部卒業後の移行期に活用しにくいと考えた。子ども一人一人をよりよく知るためには「できる」の情報だけではなく、その「できる」に至るまでに「どのような支援や手だてがとられたのか・状況づくりはどうであったのか・その結果どのような様子が見られたのか」が何より大切であり、その情報を“伝えて繋ぐ”ことこそが児童生徒を支援していく上で重要になる。そして、「どのような支援や手だてがとられたのか・状況づくりはどうであったのか・その結果、どのような様子が見られたのか」の情報が端的に記載されているものが通知票（学習の記録）である。通知票（学習の記録）の内容をデータベース化して蓄積していけば、個々の児童生徒が成長していく姿を俯瞰でき、それぞれの節目でどのような支援・手だてがとられたのかも容易に知ることが可能になる。そして、今まで以上に「できる」を伝えて繋げるのではないかと考えた。そこで通知票（学習の記録）をデータベース化したものを「情報バンク」と称し「できる」を伝えて繋ぐツールとして活用できないかという仮説のもと取組を開始した。

今年度は、本研究(三カ年計画)の最終年度ということで、全教職員が「情報バンク」を操作し、全児童生徒の通知票の情報を入力することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 研究組織

教育課程委員会を研究推進の中心に据えて、研究について意見交換、報告を行なった。同委員会は、学校長、教頭、事務長、副教頭、学部長、支援部長、学年主任、進路指導主事、生徒指導主事、キャリアアップ支援コーディネータ（以下、キャリアアップ支援Co）主任、ワーク担当、研究主任で構成されている。教育課程委員会では、共通理解を図るとともに、その中で意見交換をすることを通して改善を進めた。さらに、教育課程委員会で検討されたことについては、職員会議で報告し研究の内容を教職員に周知した。

24年度は「情報バンク検討チーム」、25年度は「情報バンクプロジェクト」、26年度は固定的なプロジェクトは編成せずに、その都度プロジェクトを編成し取組を進めていくこととした。各々のプロジェクトでは、子ども一人一人の「できる」を伝えて繋ぐツールとして“誰もが使いやすい”活用方法とシステム開発についての話し合いを行なった。

(2) 各学部の取組について

また、小学部と中学部が連携を取りながら共同で取組を進め、小学部から中学部へ移行した情報の活用度合いや情報の内容について考察し、どのような情報が活用度の高いものになるのかを検討した。さらに、進路先の協力を得ながら学部が中心となり、抽出生徒について追跡を行い、高等部から進路先へ移行した情報の活用度合いや情報の内容について考察し、どのような情報が活用度の高いものになるのか検討した。

(3) 研究の主な流れ

- 4月～ 抽出児童生徒のサンプルデータの入力を継続、システムのバグ潰し及び修正・改善
- 7月 教員研修：情報バンクの操作方法、情報の入力の仕方について

- 9月～ 全児童生徒の前期の情報を各担任中心に入力開始，その都度システムの修正・改善
- 10月～ システムのバグ潰し及び修正・改善
- 1月 平成26年度研究発表会にて報告
- 2月～ 全児童生徒の後期の情報を各担任中心に入力開始，その都度システムの修正・改善

4. 研究の内容・経過

(1) 情報バンクの機能

①短期目標，手だて，様子の入力

24年度より小中高各学部6～8名の児童生徒の入学当初からの通知票のデータをサンプルデータとして入力作業を行なった。入力した児童生徒のサンプルデータを使い，情報の検索機能の充実を目指した。これは，ただ単に子どもの「できる」の情報を入力するだけでなく，情報バンク内の情報を様々な形で出力したり，表示したりすることでより活用度の高いものになると考えたからである。

まず，情報の「入力・保存」という情報バンクの基本となる機能【図1】については，様々なトラブルを解消し“誰もが使いやすい”ものになるよう，直感的に入力しやすいものになるように話し合い，検討した。その結果，現状として概ね使いやすいものになったと考えている。

②キーワード検索機能

次にキーワード検索機能は，情報バンク内に入っている児童生徒全ての情報から，その入力したキーワードの記述のある短期目標を表示することができる。さらに，昨年度新たに個人の情報から検索できるように，システムのバージョンアップを行なった。例えば，「中学部 〇年 〇組 氏名」，そして「給食」というキーワードを入力すると，その子どもの本校入学当初から現在までの「給食」というワードの入った短期目標が検索【図2】でき，その短期目標のための手だてと取り組んだ結果の様子が検索できる。

また，これらの検索機能は他の児童生徒の支援や手だてを考える上で参考にできる。活用方法次第では，総合支援学校勤務が初めての教員や若手教員の“手引書”として用いることもできるのではないかと考えている。

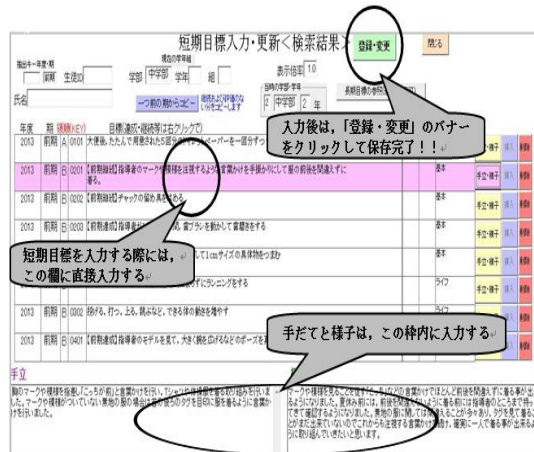


図1 短期目標，手だて，様子入力画面



図2 キーワード検索

③推移表（3期分の短期目標・手だて・様子）

三つ目は、「推移表(3期分の目標・手だて・様子)」【図3】がある。短期目標を前期・後期前期というように3期分を表示し推移でき同様に「手だて」「様子」の表示が可能である。この機能は3期分の短期目標を同時に見比べることで、過去にどのような学習に取り組んできたのかを確認することができる。

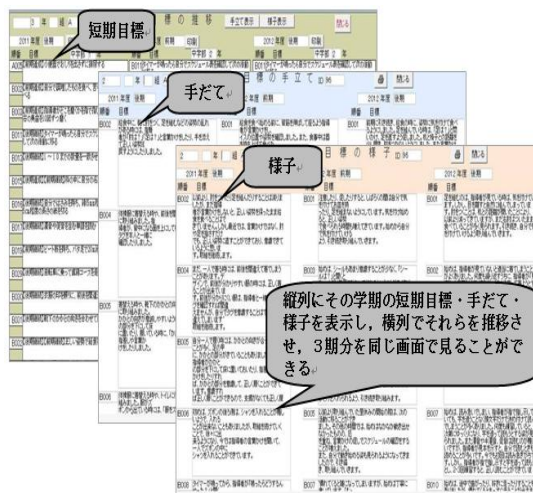


図3 推移表（3期分の短期目標・手だて・様子）

④個別の包括支援プラン区分検索機能

また、昨年度の研究途中から検索機能の充実を挙げており、「カテゴリー検索」機能を新たな機能として加えることが近々の課題となっていた。そこで、どのようなカテゴリ分けが、今後の情報バンク活用の充実に繋がるのか考察を行なった。その結果、どの教員もカテゴリ項目に馴染みが深く直感的に入力でき、検索しやすいカテゴリ分けが個別の包括支援プランの「現在の姿」の11項目【表1】であるという結論に至った。そのため、今年度7月頃より「個別の包括支援プラン区分検索」という機能【図4】を追加し、短期目標を入力する際にその短期目標が11項目のどの項目に当たるのかチェックをしていくこととした。この機能は、キーワード検索で知りたい内容の短期目標や手だて・様子が検索できなかったときに、11項目で検索することでまた別の視点からの検索が可能になり活用度が上がるものと考えている。

番号	項目
01	健康と安全
02	体や手指の動き
03	道具の利用や安全
04	日常生活活動
05	教科内容の利用、認知面、人権理解
06	生活や行動の管理、スケジュールの理解
07	趣味・遊び・余暇
08	役割・役割意識、就労や福祉制度の理解
09	人とかかわり、コミュニケーション
10	地域での生活、公共施設や公共交通利用
11	ルールの理解、集団生活の技術・技能

表1 個別の包括支援プランの11項目

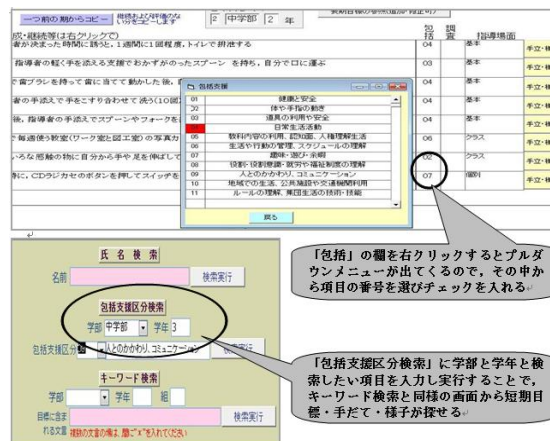


図4 個別の包括支援プラン区分検索

⑤情報バンクから通知票への出力

情報バンクに入力したデータから「通知票」【図5】として出力できるよう、システム化を視野に入れ開発を進めた。情報バンクには「どのような手だてがとられたのか・環境設定や状況づくりはどうであったのか・その結果、どのような様子が見られたか」という通知票に記載していた情報を入力する。昨年度までは、すでに通知票としてでき上がった情報をサンプルデータとして入力して、子ども一人一人の継続的キャリアアップに活用できないかという検証やシステムの改良・追加を繰り返してきた。本来は、全児童生徒の通知票を作成する際に情報バンクに情報を入力していき、情報バンクの出力機能から通知票を作成することを目指している。通知票を作成すると同時に、情報バンク内に情報が蓄積されることとなる。

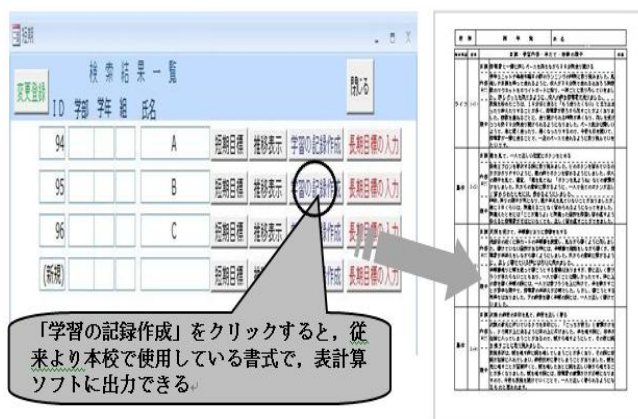


図5 情報バンクから通知票への出力

最後に、現在（平成26年12月24日現在）の情報バンクの機能のイメージ【図6】を掲載する。

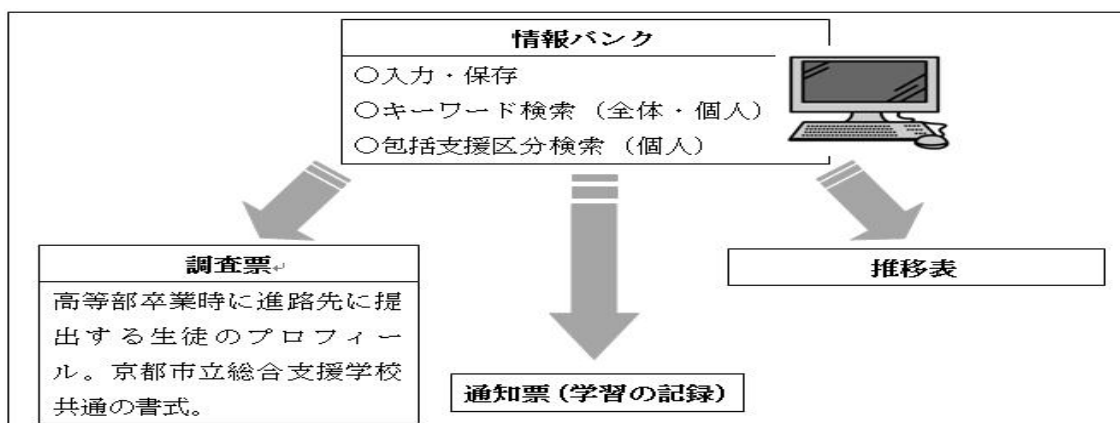


図6 現在（平成26年12月24日）の情報バンクの機能のイメージ

ここまで、情報バンク開発の経緯と現在の状況や概要について述べてきた。ただ、本研究は、情報バンクというシステムを開発することに目的があるわけではなく、どのように活用していくことで子どもの「できる」を伝えて繋ぐことができるのか、そして継続的なキャリアアップに繋がるのかを各学部の取組を通して検証することを目的とし取り組んだ。

(2) 各学部の取組

情報バンクの取組から各学部で、学部や進路先への移行期にどのような情報が必要になるのか検証を行なった。

小学部では、伝えた情報が中学部でどのように活用されているかを知り、「小学部が伝えたいこと」と「中学部が知りたいこと」が近づくようにする。そして、スムーズに中学部の学習活動に移行できるように小学部の内に、中学部に向けた活動（活動の時間等）に取り組んでおくことが大切である。

情報バンクがどのような場面で活用できるかについては、検索機能を使ってこれまでどのように学習を積み重ねてきたか、スキルを身につけたことで生きて働く力やともに生きる力としての目標へと変わっていったかなど、どのような道筋をたどって目標が推移してきたかを知ることができる。これは、長期的に見たときに有益となる情報の蓄積ではないだろうか。これまでどうだったかを知るツールとして役立つと考える。児童がこれまで歩んできた「線」としての流れやこれまでの生活等の環境を含む「面」としての蓄積を情報バンクは持っていることが分かった。

中学部の取組からは分かったことは以下の通りである。情報バンクはキーワード検索ができるので、年度初めに目標を考える際に、「横断歩道」「トイレ」「給食」などの知りたい情報についてすぐに入手することができ、推移表を見ることで今までの経過が分かる。一方で、細かいことで分からないこともあり、担任としては一日の流れに沿って、日常生活の支援の仕方や配慮等が時系列で書かれた引継ぎ資料があればいいという意見が多かった。また、本人が困った状況になった時に落ち着けるような手だてやその要因についても、特に欲しい情報であるという意見が多かった。

高等部の取組から明確になったことを以下に述べる。卒業後の進路先への情報移行については、現行の方法（「調査書」と担任による引き継ぎ）で内容の充実を図るように努めたが、4月以降、過去からの卒業生が進路先への定着が困難になるケースが生じる中で、移行情報の内容の再考を迫られるようになった。そこで、進路先が求めている移行情報は何なのか、事業所にアンケートを取ることで、把握できないかと考えた。

<p>○アンケート内容</p> <p>設問① 現在の「調査書」の項目・内容で、必要な情報は伝えられていますか</p> <p>設問② 現在の引き継ぎ（担任が訪問）方法・内容で、必要な情報は伝えられていますか</p> <p>設問③ 生徒の情報を伝えるために必要なもの・ことがあれば自由にご記入ください</p>
--

アンケートは、過去2年間で生徒が卒業後に利用した39カ所の事業所に協力を仰ぎ、26カ所から回答を得た。

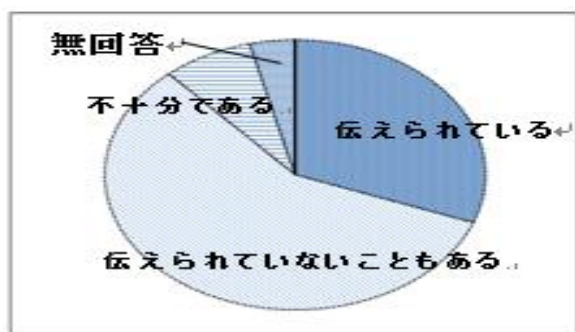


表2 アンケート設問①の結果

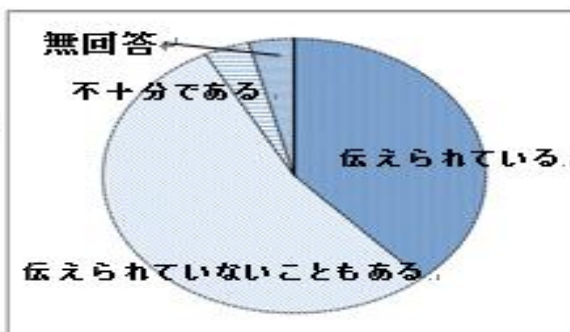


表3 アンケート設問②の結果

アンケートの結果を見ると、情報の移行について「伝えられていないこともある」という回答が半数以上あった。では、どのような情報が不足しているのか、伝えられていない項目を見てみると、「気になる行動」と「家族情報」についてが多く、次に「障害（医療情報含む）」について、が多かった。進路先からは他にも、「受け入れる生徒の実習はもっと日数を増やしてほしい」「学校生活の様子を見学させてほしい」「移行後の再度の引き継ぎ」「できるの過程が知りたい」などの意見が寄せられた。これらの項目は、高等部が中学部や中学校に移行情報として求めるものと同様であり、それらがあることでスムーズに新たな生活が始められる

ことも容易に想像できる。また、「できるの過程を伝える」ことは、今年度の研究の内容にも繋がる。学校でできるようになったことが、卒業後も使えるように、状況づくりと支援を考えながら取組を進めているが、それを進路先に引き継ぐことが最も大切であることが分かった。

5. 研究の成果

今年度は、年度当初より、全児童生徒の様々な「できる」の情報及び「できる」に至るまでの情報を蓄積していくことを目指して取組を進めた。7月には、全教職員対象に「情報バンク」に関する校内研修会を行い、全児童生徒の情報を入力に至った。このことは、本格的運用への大きな一歩となった。

また、「情報バンク」の取組を通して、各学部の情報移行について様々な検証がなされた。高等部の取組では、進路先にアンケートを実施することで情報を受け取る側として「気になる行動」「家族情報」が詳しく知りたい、「過去の取組の過程や成長の履歴」の情報がほしいという生の声を聞くことができた。情報を受け取る側の「ほしい情報」が知ることができたので、今後進路先への情報として「いつ、誰が、どのようにして」引き継いでいくかを考えていくことが重要になる。

各学部の取組を進めていく中で、入学先・進学先、または進路先での生活をスムーズにスタートさせるためには、その児童生徒の「一日の過ごし方や落ち着いて生活するための方策」などの情報が必要であることが分かった。そして、入学先・進学先、または進路先での生活が落ち着いたころには、キャリアアップのために「過去の取組の過程や成長の履歴」などの情報バンクの情報が必要であることが明らかになった。

6. 今後の課題・展望

多くの教員が操作する中で「入力した情報が消えた」「情報が他の生徒のものに入れ替わった」などのシステム上の問題が起り、一時「情報バンク」の使用をやめざるを得ないことがあった。現在はより使いやすくなるように、その都度調整しながら、各々の機能が順調に稼働している状況である。さらに、今年度、個別の包括支援プランの11項目での検索が可能になったが、この機能とは別に、更なるカテゴリ検索機能を追加していく必要があることがあがった。これは、検索する人がより直観的に検索できるようにしていくことと、検索できるカテゴリの種類が多いことが今後の活用のためには不可欠であり、より利便性が高くなると考えるからである。

7. おわりに

児童生徒の情報移行について深く考える機会となり、一方的に情報を渡すだけでは、後々その情報が活用しにくいことが分かり、いかに相手のニーズに応じた情報を提供できるかが重要であることが明確になった。「情報バンク」そのものも今年度より全校児童生徒の情報を蓄積し始め、今後、さらに多くの情報を蓄積することにより、その価値が上がると思われる。現段階の情報量ではまだまだ検証できないこともあり、来年度以降も全校児童生徒の情報を定期的に蓄積すると同時に、必要に応じてシステムの改良、機能の追加を繰り返し子どもの“できるを伝えて繋ぐ”ツールとして確固たるものにしていきたいと考える。